

[国 語]

説明文教材における筆者の主張を読み取り、
要約文を書く力を高める指導の工夫

- 5年生「生き物は円柱形」における文章構成表の効果的な活用 -

駒谷 詩織*

1. はじめに

小学校学習指導要領国語編の第5学年及び第6学年「読むこと」の説明的な文章の解釈に関する指導事項に、「目的に応じて、文章の内容を的確におさえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」とある。「目的に応じて、文章の内容を的確におさえて要旨を捉える」とは、文章の重要な点を表現に即して的確に押さえ、求められている分量や表現の仕方などに合わせてまとめることである。また、「事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりする」とは、筆者の意図や思考を想定しながら文章全体の構成を把握し、自分の考えを明確にしていくことである。文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にするためには、文章に書かれている話題、構成の仕方を捉え、筆者の主張を正確に読みとることが必要である。

自学級で説明的文章の学習を行った際、筆者の考えに対して自分の考えを書く活動では、「何を書いたらよいかかわからない。」と、なかなか書き出せなかったり、書いているうちに筆者の主張と離れてしまったりする児童の姿があった。また、内容の読み取りが不十分であるため、大まかな内容はつかんでいても、要約して文にまとめることができない児童が多いことがわかった。そこで、筆者の伝えたいことに対して自分の考えをもつための前段階として、まずは筆者の伝えたいことを正確に読み取る力を身につけさせることが必要であると考えた。では、筆者の伝えたいことを正確に読み取るためには、説明文を具体的にどのように読んでいけばいいのか。白石は、その基盤になるのが「要点をとらえる」「要約する」「要旨を読む」という学習であるとしている。「要点」は形式段落をまとめたもので、「要約」とは、段落の要点を、段落相互の関連を考えてつないだもののことである。各段落の要点をまとめて要約文を書くという活動を行うことで、要旨や筆者の伝えたいことを正確に読み取る力を高めていきたい。

白石は、要約文を書く方法として、「『要点』をつなげた要約文を書く」こと、「要旨を踏まえて簡潔にまとめて要約文を書く」ことの二つを挙げている。「『要点』をつなげた要約文を書く」方法は、要約文を書く際に一番基本的な方法であり、それぞれの段落の要点をまとめる活動から入っていく。その要点をまとめるための段階として、文章全体の構成をもとに、それぞれの段落がどのようにつながっているかを把握し、どのような考えを筆者が述べているかを捉える。「要点をまとめる」、構成を把握するための「文章構成の学習」から、要約文を書く活動に移っていくのである。また、二瓶は、説明文でつけるべき力として「伝えたいことを正確に受け取る力」をあげている。これは、筆者が伝えたいことを論理的に読み進めること、読者が納得して読み進めることである。また、二瓶は説明文で獲得させるべき力を育てるために、「説明文『自力読み』の学習過程」として、指導内容と合わせて8つの学習過程を設定している(表1)。

各段落の一文要約から、全体の要約まで段階を踏んで進めていくことで、児童が書かれていることに納得しながら読み進めていくことができる。このような学習過程は要約の初歩段階における自学級の児童の実態に合っており、抵抗なく説明文全体の要約文を書くことができるのではないかと考える。

そこで、本研究では5年生「生き物は円柱形」の学習において、教材文の構成を捉え、要約文を書くために必要なキーワードを集めるための手立てを行うことが、要約文を書く際に有効であるかどうかを検証する。そのため、児童一人ひとりが筆者の主張を正確に読み取り、要約文の書き方を理解して書くことができるような授業を構想し、展開する。

表 1 説明文「自力読み」の学習過程

説明文「自力読み」の学習過程

- ① 基本構成「序論・本論・結論」の把握
- ② 序論と結論の性格の把握
- ③ 意味段落にわけ、小見出しをつける。
- ④ 意味段落の論の展開を検討する。
- ⑤ 意味段落の要点をまとめる。(一文要約)
- ⑥ 文章全体を要約する。
- ⑦ 文章の中心(要旨)をとらえる。
- ⑧ 筆者へのメッセージをまとめる。

* 柏崎市立比角小学校

2. 研究の目的

5年生国語「生き物は円柱形」の学習において、文章構成表（説明の部屋）を用いて文章の構成をつかみ、段落の要点を捉える手立てを行うことが、筆者の主張を読み取り、要約文を書くことに有効であることを明らかにする。

3. 研究における実践の内容と検証方法

(1) 実践の内容

本実践を行う前に、同じ単元の中にある「見立てる」という教材文を読み、要約文を書く活動を行った。ここでは、文章構成表として二瓶の「説明の部屋」を活用し、各段落の要点を捉えた上で要約文を書いた。それぞれの段落に書かれていることは読み取れたものの、筆者の主張を読み取れない、要約文をどのように書いたらよいかわからない、という姿が見られた。文章構成の「はじめ」「中」「おわり」の性質や、要約すること自体を児童が理解していなかったことが原因であったと考えられる。これらの点を踏まえ、以下のような内容で実践を進めていく。

① 文章の構成をつかむために

ア 文章構成表（説明の部屋）の活用

文章構造を理解し、それぞれの段落の要点を読み取るために、文章構成表を活用する。文章構成表は、二瓶の「説明の部屋」を活用する。二瓶は、説明的文章の仕組みを「はじめ・中・おわり」の基本構成でとらえさせるために、「説明文を一つの大きな建物」として説明している。意味段落を「部屋」とし、「はじめの部屋（序論）」「中の部屋（本論）」「おわりの部屋（結論）」の3つに分けてとらえることで、説明文の仕組みを考えることが大切であるとしている。説明文を読み、文章構成表に当てはめていくことで、文章構成を視覚的・構造的にとらえられるようにし、段落の内容や相互の関係を理解できるようにする。これまで、「説明の部屋」は本実践の前に「見立てる」という説明文を読む際に活用している。部屋の形にまとめることで「文章の構成が見やすくなる。」「段落に書かれていることがすぐにわかる。」等、児童もその有効性を感じている。本実践でも同じ形式のものを使用し、段落の要点や筆者の主張を正確に読み取るための手掛かりとしたい。

② 段落の要点を捉え、要約文を書くために

ア 各段落の小見出しから、一文要約を行う活動

児童の実態として、教材文をもとに自分で要約できる児童は多くない。内容は読みとれていても、改めて「要約」となると、大切な文や落としてはいけない内容はどれか、どのようにまとめればよいか、わからなくなってしまう傾向がある。そこで、各段落に小見出しをつけ、そこから各段落の一文要約を行っていく。読み取った内容を小見出しと関連付け、スムーズに一文要約につなげられるようにしたい。

イ キーワードを見付ける観点、要約モデル文の提示

本研究ではそれぞれの段落の要点や筆者の主張につながる語句であるキーワードをまとめて文章化し、要約文を書く学習に取り組む。筆者の主張を読み取りながら要約文を書くためには、文章構成を理解して各形式段落の内容を読みとること、キーワードを見付ける力を高めることが必要であると考えた。そこで、児童にキーワードを見付ける観点を提示し、文章構成表と教材文から筆者の主張につながる言葉を見付ける活動を行う。このとき、教師が作成した「見立てる」要約モデル文を提示し、要約モデル文と教材文、文章構成表を比べることで、キーワードの見付け方を指導する。どの児童も見付け方を理解した上で、活動に取り組めるようにする。また、「要約についてのイメージを持ってない」「どう書いたらよいかわからない」という児童も、モデル文を読んでイメージをもつことで、見通しをもって要約文を書くことができるようにする。

(2) 検証方法

本実践の前に、「見立てる」という説明文を読み、要約文を書く活動をしている。「見立てる」を読んで書いた要約文と、改めて「説明の部屋」の性質を押さえ、モデル文や観点の提示後に書いた「生き物は円柱形」の要約文とを比較し、要約文を書く上での手立ての有効性について探る。

4. 実践の実際

(1) 単元名

筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えを発表しよう。 「生き物は円柱形」 （光村図書 5年生）

(2) 単元の目標

段落の構成をつかみ、筆者の主張を読み取って要旨をとらえ、要約文を書く。

(3) 実施対象及び実施時期

① 実施対象 5 学年 1 クラス 30 名 (男子 17 名, 女子 13 名)

② 実施時期 平成 29 年 7 月

指導計画 (全 12 時間)

次	時	主な学習活動
1 次 学習の見通しをもつ	1・2	① 学習課題を設定し、学習の見通しをもつ。 ② 「生き物は円柱形」を読み、全体の内容をつかむ。
2 次 文章の構成を つかむ	3～8	① 「はじめ」「中」「終わり」の部屋の性格を確認する。 ② 意味段落を「はじめ」「中」「終わり」に分け、文章構成表「説明文の部屋」を書く。 ③ 「はじめ」「おわり」の部屋に書かれていることを読み取る。 ④ 「中」の部屋に書かれていることを読み取る。 ⑤ 意味段落に書かれていることを読み取り、小見出しを付ける。 小見出しから、各段落の一文要約を書く。
3 次 要約文を書く	9～12	① 「見立てる」要約モデル文と、「キーワードを見付ける観点」をもとに、キーワードの見付け方を知る。 ② 観点をもとに、「生き物は円柱形」の要約文を書くためのキーワードを見付ける。 ③ 見つけたキーワードをもとに、要約文を書く。

5. 授業実践の実際と結果

(1) 文章の構成をつかむために

① 文章構成表「説明の部屋」の活用

これまでの学習から、説明文が「はじめ」「中」「おわり」の構成で書かれていることは、ほとんどの児童が知っていた。しかし、「はじめ」「中」「おわり」の構成で、どのように分けることができるのか、それぞれに何が書かれているのかについては、理解が曖昧な児童が多かった。そこで、図 1 を示し、説明文全体を大きな家とし、3 つの部屋に分けられることと、それぞれの部屋の性格を示した。この図は毎時間提示しておき、いつでも児童が確認できるようにした。また、文章全体の構造をとらえるために、どのようにまとめられているか、二瓶の分類の仕方を提示した (表 2)。

これらの図や表をもとに、「生き物は円柱形」の段落が、それぞれの部屋のまとまりになるのかを考え、当てはめていった。そして「はじめ」の部屋と「おわり」の部屋の内容から、「生き物は円柱形」は「はじめ」と「おわり」の部屋で筆者の考えがまとめられている双括型であることを確認した。まとめがどこで述べられているかを把握することで、児童はこの説明文では筆者の主張がどこに書いてあるかを理解することができた。

(2) 段落の要点を捉え、要約文を書くために

① 各段落の小見出しから、一文要約を行う活動

次に、それぞれの段落で読み取った内容から段落に小見出しをつけ、一文要約を書きこんでいく活動を中心に行った。各段落を読み、どんな小見出しが付けられるかを確認したのち、その小見出しについて説明する文を一文で考えさせた。そしてそれぞれが考えた文を一文要約とし、「説明の部屋」に書き加えていった。このとき、一つ一つ全体で考えを交流

おわりの部屋	中の部屋	はじめの部屋
③ 筆者の考え・メッセージ ② 問いの答え ① おわりのまとめ	説明	③ はじめのまとめ ② 問いの投げかけ ① 話題の提示

図 1 「説明の部屋」の分け方と部屋の性格

表 2 まとめの分類

まとめの分類

- ① 頭括型・・・「はじめ」にまとめが述べられている。
② 尾括型・・・「おわり」にまとめが述べられている。
③ 双括型・・・「はじめ」と「おわり」にまとめが述べられている。

共通性…生き物は円柱形ということ。

生き物は円柱形										
⑪ 生き物は円柱形である。	⑩ 円柱形は生き物の体の基本形である。	⑨ 円柱形は強い形である。	⑧ 円柱形は丸い形である。	⑦ 円柱形は丸い形である。	⑥ 円柱形は丸い形である。	⑤ 円柱形は丸い形である。	④ 円柱形は丸い形である。	③ 円柱形は丸い形である。	② 円柱形は丸い形である。	① 円柱形は丸い形である。

図 2 児童が書いた文章構成表 (説明の部屋)

しながら進めることで、自分の力ではなかなか一文にまとめられない児童も、他の児童の一文要約を聞くことで納得しながら読み進め、「説明の部屋」を完成させることができた。児童が完成させた「説明の部屋」は図2のとおりである。また、各段落の内容を一文で表していくことで、筆者がどのように話題を提示し、どのような例を挙げて説明しているかが視覚的にわかりやすくなり、文章全体の構成をとらえることができた。また、児童は「はじめ」の部屋と「おわり」の部屋には「多様性」と「共通性」という言葉が出てきており、ほぼ同じ内容が書かれていることに気が付いた。このことから、「生き物は多様であること、多様な中に共通性があること」を筆者が強調している、ということを捉えることができた。

② キーワードを見付ける観点・要約文モデルの提示

文章構成表を活用することで、各段落の要点や筆者の論の流れが一目でわかるようになった。そこで、文章構成表と合わせて、キーワードを見付ける力を高めるために、児童に「キーワードを見付けるポイント」として観点を提示した(表3)。その際、教師が作成した「見立てる」の要約文モデルと一緒に提示した。「見立てる」の教材文と要約モデル文を比較し、観点を使ってキーワードがどれにあたるかを考えさせた。

まず、「見立てる」の教材文と要約モデル文でキーワードの見付け方を確認した。その後、「生き物は円柱形」の教材文と文章構成表を並べて、キーワードを見付ける活動を行った。

実践前、A児は「見立てる」の教材文から、4つのキーワードを見付けていた。また、見付けたキーワードを全て使って、要約文を書いた。B児は、「見立てる」の教材文から2つのキーワードを見付けていたが、それは「繰り返し出てきているから」という理由であり、筆者の主張と結びつくキーワードを見付けることはできなかった。以下、キーワードを見付ける際の児童とのやり取りである。

表3 キーワードを見付ける観点

キーワードを見付けるポイント

① 繰り返し出てくる言葉

文章の中に繰り返し出てくる言葉は、筆者の主張に関係していることが多い。

② 筆者が言いたいことを表している言葉

「である」と言い切っている。「つまり…」とまとめている。

③ 言い換えてまとめている言葉

段落の中にでてきたことを、まとめていたり、言い換えたりしている言葉は、キーワードになっていることが多い。

T: キーワードを見付けるポイントを使って探してみると、キーワードはどれだと思う?

C1: 「円柱形」だ。何度も出てきているから。(ほぼ全員が頷く。)

T: じゃあ、「円柱形」はキーワードの一つでいい? 「円柱形」以外にもありますか?

C2: 「生き物」もたくさん出てきています。

C3: 「生き物」が「円柱形」ってことでしょ。円柱形とセットな感じ。

C4 (B児): 「新聞紙」です。

T: 「新聞紙」もキーワードでいい?

C3: 「新聞紙」は何度も出てきているけど、ちょっと違うような・・・。

C5: 「新聞紙」は例というか、円柱形が強いのを説明しているだけ。

C6 (A児): 「共通性」と「多様」もです。しかも、「はじめ」と「おわり」の部屋に出ています。

T: 説明の部屋を見ていて、気が付いたことはありますか?

C7: 「円柱形」は「中」の部屋ではたくさん出てきているけど、「はじめ」と「おわり」には出てきていないです。

まず、①の「繰り返し出てくる言葉」の観点から、児童全員が見付けたのは「円柱形」というキーワードであった。題名にもなっている言葉として、多くの児童が一番重要なキーワードとして「円柱形」を選んでいった。次に、A児は、文章構成表の「はじめ」と「おわり」の部屋の性質に着目した。ここには筆者の考えやメッセージ、まとめが書かれているという性質から、②の観点「筆者が言いたいことを表している言葉」が「共通性」と「多様」であることに気が付いた。A児の発言から、「多様」「共通性」が筆者の主張につながるキーワードであることを全体で確認した。B児は、①の観点から、繰り返し出てきている「新聞紙」「チョウ」「植物」もキーワードであると考えた。また、「共通性」と「多様性」も、B児の中では優先順位は低いものの、繰り返し出てきたキーワードとして挙げた。この後も、「キーワードを見付けるポイント」と「説明の部屋」をもとに、キーワードを探していった。児童が見付けたキーワード数の変化は、表4、5の通りである。A児、B児ともに見付けたキーワード数が増えていた。「見立てる」を読んだ際にはキーワードを見付けることができなかった児童も、キーワードを見付ける観点をもとに探すことでキーワードを見付けることができたことがわかる。

表4 キーワードを見付けた人数の変化

見付けた キーワードの数	「見立てる」 (観点活用前)	「生き物は円柱形」 (観点活用後)
5	0人	12人
4	5人	11人
3	20人	7人
2	5人	0人

表5 A児, B児が見付けたキーワード数の変化

児童	「見立てる」 (観点活用前)	「生き物は円柱形」 (観点活用後)
A児	4	5
B児	1	4

この活動を通して、児童は「新聞紙」や「チョウ」「木の葉」は例えとして挙げられていること、「円柱形」という言葉が中の部屋でしか使われていないことに気が付いた。このことから、「生き物は円柱形」ということが筆者の一番伝えたいことではなく、「共通性」の例として筆者が「円柱形」を挙げており、「『多様さの中に共通性がある』」ということが、筆者が一番伝えたいことである」ということを理解することができた。「生き物は円柱形」の文章構成を捉え、観点を示したことが、キーワードを正確に見付け、筆者の主張を読み取ることに繋がったと考えられる。

文章構成表を活用し、キーワードを見付ける活動を行った後に、「生き物は円柱形」の要約文を書く活動を行った。以下にA児とB児が実践前に書いた「見立てる」の要約文と、実践後に書いた「生き物は円柱形」の要約文を示す。B児の要約文を比較すると、「見立てる」の要約文は教材文を短くしただけになっており、筆者の主張とは離れた文も入っている。200字程度で書いたものの、見つけたキーワードのうち1つしか使うことができず、文が途中のまま終わってしまっていた。このときB児は「どうやって書いたら分からない…」とつぶやいており、要約文のイメージがない状態であった。「生き物は円柱形」の要約文の方を見ると、段落を一文要約した言葉やキーワードを中心に筆書いている。最後も、筆者の主張で書き終えている。A児の書いた要約文も、「見立てる」の要約文と比べると、無駄な部分がなくなっており、すっきりとした文になっている。要約モデル文を見たり、キーワードを見付けたりする活動を取り入れたことで、どんな言葉を使えばよいか分かり、筆者の主張をおさえて書くことができたと考えられる。

ぼくたちは、知らずに「見立てる」という行いをしている。たとえばあやとりで説明すると、取つたりからめたりすると形ができる。それを何かに見立てて形に名前をつける。しかし、同じ形でも、地いきによって呼び名がかわってくる。日本各地で名前を集めると約三十種類にもなる。世界でも同じだ。アラスカ西部で、「かもめ」と呼ばれているのが、カナダでは「ログハウス」と呼ばれている。このようにその地いきで呼ばれる名前でも違う地いきでは違う呼び名で呼ばれるということだ。

B児が書いた「見立てる」の要約文

地球上には、さまざまな円柱形の生き物があるが、共通性がある。生き物は円柱形で多様な部分もある。円柱形は強い形で速い形である。円柱形はさが細長いものもある。だから生き物の体の基本は、円柱形とも言える。生き物は多様だが、共通性がある。その多様な中で、共通性を知ることが面白い。それと同時に、多様なものの中から共通性を見出し、なぜ同じなのかを考えることも、実に面白い。

B児が書いた「生き物は円柱形」の要約文

私たちは、知らず知らずのうちに「見立てる」という行為をしている。関係のない二つを結びつけるとき、想像が働いている。あやとりを例としよう。一本のひもを輪にして結び指にかける。これと、二人や三人でと、形を作る。ひもが作り出した形に名前がつけられる。これが「見立てる」ということだ。あやとりで作った形と、実在するものが、結び付けられる。同じ形でも、地域によって名前が違う。日本各地で名前を集めると、約五十種類にもなる。このように、見立てるという行為は、想像力に支えられている。そして、想像力は私たちの自然や生活と深く関わっているのである。

A児が書いた「見立てる」の要約文

生き物の生き物らしいところは、多様だということである。その多様な中に、共通性がある。それは、「生き物は円柱形」だということだ。円柱形は、強い形だ。強いだけではなく、速い形でもある。だからこそ、生き物の体の基本となっていると言ってもいいだろう。生き物は、じつに多様である。「ああ、こんな生き方をしている生き物もいるのだ。」と、その多様さを知ることが面白い。また、共通性を見出し、なぜ同じなのかを考えることも実に面白い。

A児が書いた「生き物は円柱形」の要約文

6. 成果と課題

(1) 文章構成表「説明の部屋」の活用について

本実践では、文章構成表を用いて説明文を読み進めていった。この構成表を使うことで、どの児童も文章全体の構成を捉え、各段落に書かれている内容を読み取ることができた。また、要約文のキーワードを見付ける際にも、この構成表が役立った。

「生き物は円柱形」の実践前と実践後に行ったアンケート調査を比較してみると、「『はじめ』『中』『おわり』の説明の部屋の性質や段落の分け方がわかった」と答えた児童が10%、「それぞれの段落に書かれていることがわかった」と答えた児童が26%増加した。また、文章構成表から「筆者の主張を見付けることができた」と答えた児童は、34%増えており、文章構成表が筆者の主張を見付ける手掛かりになっていたことがわかる。

表 6 アンケート調査の結果

項目	実践前	実践後
「はじめ」「中」「おわり」の説明文の性質や段落の分け方が分かった。	70%	80%
それぞれの段落に書かれていることが分かった。	50%	76%
筆者の主張を見付けることができた。	36%	70%

このことから、説明文を読む学習において、文章構成表として「説明の部屋」を活用することは、文章の構成をつかみ、段落の要点をとらえる手立てとして有効だったと考えられる。

(2) 各段落の小見出しから、一文要約を行う活動について

それぞれの段落で読み取った内容から段落に小見出しをつけ、一文要約を文章構成表に書き込む活動を行うことで、筆者がどのように話題を提示し、どのような例を挙げて説明しているかが一目でわかるようになった。一人ではなかなか一文要約ができない児童も、小見出しをヒントに考えたり、全体で意見を交流しながら一文を決めたりしていくことで、納得しながら読み進め、一文要約をすることができた。ここでまとめた一文要約の言葉を文章全体の要約文を書く際に使っている児童が何人もいた。要約文を書く活動において、小見出しから一文要約を行い、文章構成表にまとめる活動が役立ったといえる。

(3) キーワードを見付ける観点・要約文モデルの提示について

文章構成表と教材文、観点を見比べながらキーワードを探すことで、それぞれの段落の要点がわかり、キーワードを見付けることができた。また、要約文モデルを示したことで、要約のイメージがもてなかった児童も、ゴールが見えたことで見通しをもって書き進めることができた。キーワードを見付ける観点と要約文モデルを提示した上でキーワードを見付ける活動を行うことは、要約を書く前の段階の手立てとして、有効であったと考えられる。

(4) 今後の課題

本研究では、筆者の伝えたいことに対して自分の考えをもつための前段階として、筆者の伝えたいことを正確に読み取るために要約文を書く活動を行った。しかし、学習指導要領において高学年「読むこと」の説明的な文章の解釈に関する指導事項としては、「事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」が示されており、要旨をおさえるだけでなく、説明文を読み、自分の考えを明確にして読むことが求められている。今後は、筆者の主張を読みとった児童が自分の考えをもち、表現するため手立てを考えていく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 金城光恵「説明的文章における要約力を高める指導」名護市立教育研究所、1991年
- 2) 芝山真樹子「要旨を捉え自分の考えを明確にしながら読む力を高める小学校国語科学習指導の工夫－『思考構成シート』を活用して自分の意見を表す活動を通して－」広島県立教育センター、2013年
- 3) 白石範孝「読解力がつく白石流『要点・要約・要旨』の授業」学事出版、2013年
- 4) 二瓶弘行「二瓶弘行の国語授業のつくり方」東洋館出版社、2011年
- 5) 保坂国馨「推敲活動の工夫を図り書く力を育む指導－4年生説明文単元『僕が、私が見付けたひみつブックを作ろう』の実践を通して－」『教育実践研究第25集』、上越教育大学、学校教育実践センター、2015年
- 6) 文部科学省「小学校学習指導要領解説国語編」東洋館出版社、2008年
- 7) 文部科学省「全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて～」国立教育政策研究所 教育課程研究センター、2012年